

情動調整の回復に向けての母子関係支援の研究 —グレーゾーンの子どもたちへの発達支援の立ち上げ—

須田 治
(東京都立大学 人文学部)

<要 旨>

この研究では、アスペルガー症候群と疑われる、境界上にある子どもたちに焦点をあて、情動調整の発達とその調整不全という行動現象の解明に関心を向けることにする。ここでは、いわゆるグレーゾーンの子どもたちに対応した発達支援室のアプローチを行い、対人的な情動の調整とその発達機序の解明をもっとも重要な主題であると見る検討を行っていった。本論の目的は、関係にかかわる情動調整の発達機序の解明を問題としてとりあげ、発達臨床において観察したデータにもとづき査定し、調整の生成をめざした支援実践を行い、その関連のなかから論ずることである。ここでは、グレーゾーンの子どもたちに固有の発達の障害を推測し、子どもの他者との感情体験上の相互浸透作用のはたらきを論じることにする。それによって発達分析をベースとした「関係への支援」の有効性をしめすことにしたい。

<キーワード>

情動調整、調整の不全、グレーゾーンの発達危機、発達支援、アスペルガー症候群

はじめに

発達心理学者が、子どもへの支援を進めるときには、当然、発達の分析をすすめることにより、より深い発達の機序への理解をすすめることが周囲のどこからも期待されるであろう。この期待に応えて 1990 年代以降の海外では、発達臨床的な情動発達の研究が広がっていった。対人関係発達の領域では、観察にもとづく査定がすすみ、情動調整という概念が生みだされて、調整不全とその回復への新たな臨床的関心が高まっていった。そもそも情動調整とは、情動の身体的な調節にはたす個体内的調整から始まり、他者とのじっさいの対人的調整へと発達の展開していくものをさす。すなわち、情動の生得的な個別機能が出現し、生体調節の一部として諸反応が機能を始めてから、しだいに養育者などとの関係の調整としてコミュニケーション化していくような変化、開花への道順がある。そこには子ども自身の主体が、新たな生の質へと展開するような発達がある。わたしたちが情動の

調整の発達と、その調整不全を問題とするのは、もしその発達が妨げられたなら関係が絶たれ、主体は生物的にも社会的にも孤立するからである。そこでわたしたちの支援では、子どもの行動上の特徴の個体の能力的な査定を知ったうえで、それを超えて子どもの関係的調整の問題に関わることにする。些細でもその子どもの生の質を問いなおすような根源的本問題がそこにはある。しかしわが国の発達臨床では、情動調整への機序理解をベースに査定や支援をすすめる研究や方法論は、きわめて少ない。とりわけ幼児期のアスペルガー症候群などの発達危機の領域では、そこにさまざまな情動的な対人関係の問題が指摘されているにも関わらず、研究が進んでいるとは言えない。情動を関係的な機能のなかでとらえる研究の成果、すなわち調整発達への解明の技術を、新たにこの領域へと移植することが必要である。そこでこの研究では、グレーゾーンの発達危機の子どもへの支援を情動の調整論の視点からすすめることにした。な

おこの間に、支援体制の可能性を探り、査定・支援・発達機序解釈にわたっての検討を併行して進めている。

1. 方法

a) 発達の分析の導入

この報告では、代表値をもちいて、診断と支援によって支えられた支援実績を検討することはせず、ケースの具体的水準の問題行動の変化を支援実践との関係で検討する。そのなかでその子どもの行動上の情動調整と、その回復をとりあげ、どのような発達の推定、ことに対象児の生物・情動的な発達の状態の査定がどうであり、支援技法、ことに環境系の再修整によって情動的コミュニケーションや社会参加をもたらしたかを具体的に検討することにする。

b) 対象の抽出

対象となった子どもは、いずれも幼稚園児であり、園と大学内の支援室との両方で観察し、繰り返して観察し行動の査定がなされた。とりあげた子どもは、アスペルガー症候群の疑いのある2事例である。ケース名は、男児X 5歳、女児Y 5歳である。とくに認知、言語の広範な遅れは認められない。子どもは母親と個人ごとに支援室に来室している。

c) データ抽出と質的データ解析 ここではX児の行動上の発達変化のコースをまとめた。個人の特徴をとらえる行動パターン抽出のため、各時点でのさまざまなシーンのなかから関係調整の困難をしめした5分を抽出した。のデータから、子どもの情動行動の機能が支援経過とともにどう変化したかが明らかにされる。

d 1) 行動指標セットによる査定

行動要素を観察して、その情動発達の特徴を記述する方法として、Sroufe, et al., 1984 のチェックリストをもちいた。また withdrawal 行動など関係参入をとらえるための指標ももちいた。この報告は略す。

d 2) 対人的インターラクシオン過程についての査定

子どもの社会参入の様子は、微視的な行動の変化に現れる。その流れを記述するため、インタラクティブな過程を分析した。今回報告するのは表1の指標が主となる。ここには状況への参入、刺激の回避や遮断、破壊など自己の緊張処理に関わる粗大行動で挙げてある。

この他に情動表出なども記述している。

表1 他者への関わりの指標

participation	人びとのなす活動文脈への参入
isolated-play	人びとは異なる活動への自己投棄
withdrawal	以下の1プラス2。刺激の遮断、状況回避のための引きこもり。
withdraw 1	視線の持続的な目そらし、うつむき
withdraw 2	目そらしとともに身体の活動生の低下
escape	活動の場からの(社会的に意味をもつ)逸脱
acting-out	遊びへの破壊的な行動

2. 結果と考察

a) 初期査定結果

X児、Y児とも、支援室および幼稚園で、集団への参入に支障があり、ひきこもり反応やパニックになることなどの問題のあることなどが明らかになった。しかし厳密にはその問題の様相に幾分かの相異があるといえる(表2)。

表2 Y児との比較で見たX児の特徴

X児	Y児
男児5歳	女児5歳
右の特徴なし	音への泣き・不快
注視への抵抗・引きこもり	左の特徴なし
右の特徴なし	めざましい記憶力
感情の言葉が少ない	感情の言葉が少ない
集団参入の著しい困難	特定のこだわり

b) 支援室のなかでの子どもの変化

支援室のなかでの子どもの変化は、図1のとおり9月以降しだいに withdraw 1と2の減少として起こっている(観察時間にたいする生起時間の%)。つぎにこの変化1と2を加算した指標 withdrawal を、観察時間(秒数の集計値)によって図2は示している。この行動はY児には見られず、X児の良く見せる過剰刺激回避の行動パターンであることが解ってきた。彼の集団参入の困難のいくつかにおいてこの行動が見られる。その判断にもとづき、7月終了時点から、よりマイルドな刺激環境になるように支援内容を変化させた。図3では、その方針決定が、若手の複数の支援者の行動に現れている。この支援者は、最初の2回のあいだは「子どもに先行して関係的な行動を誘導」した(INITIATIVE という指標、出現頻度の集計値)。しかし9月以降しだいに子

図1 支援室での子どもの関わりの変化 (%)

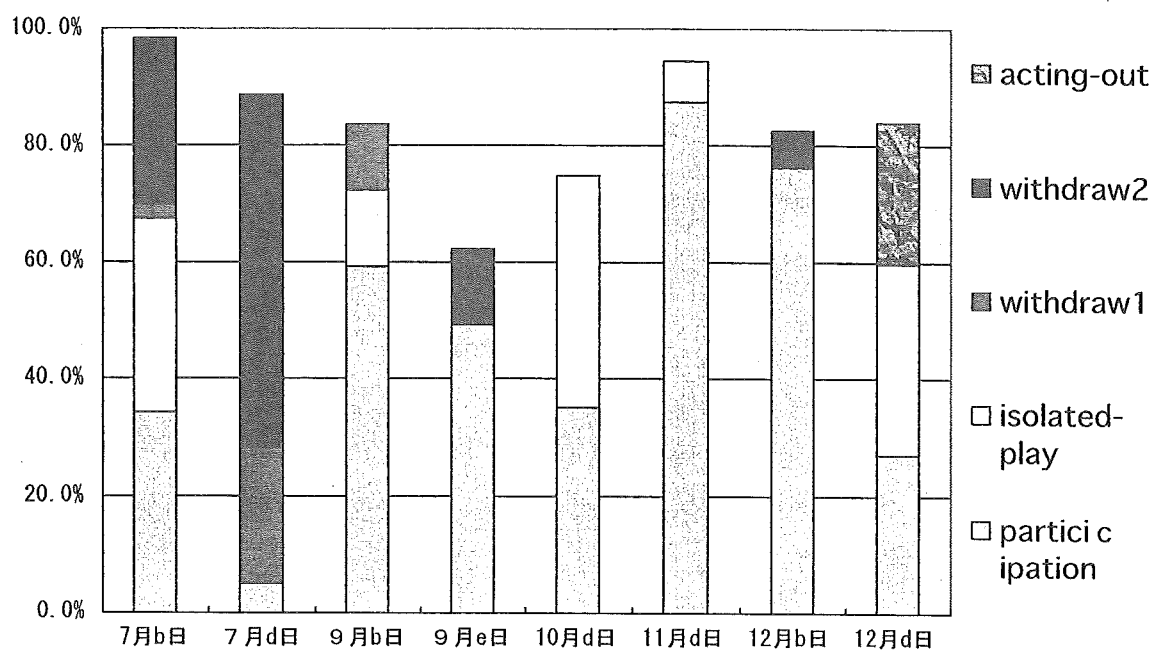


図2 withdrawalの支援ごとの変化 (秒)

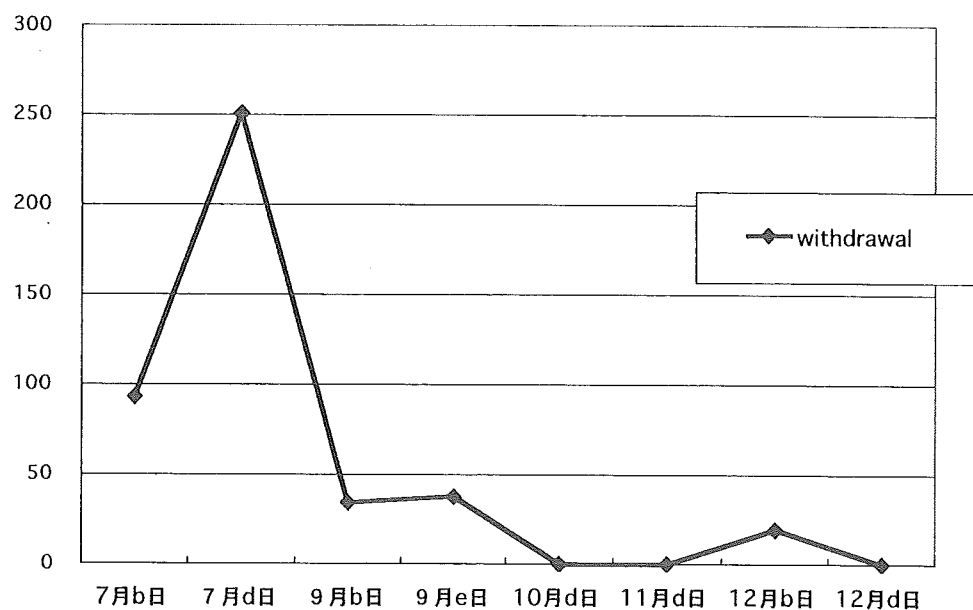


図3 支援室での支援行動の変化（頻度）

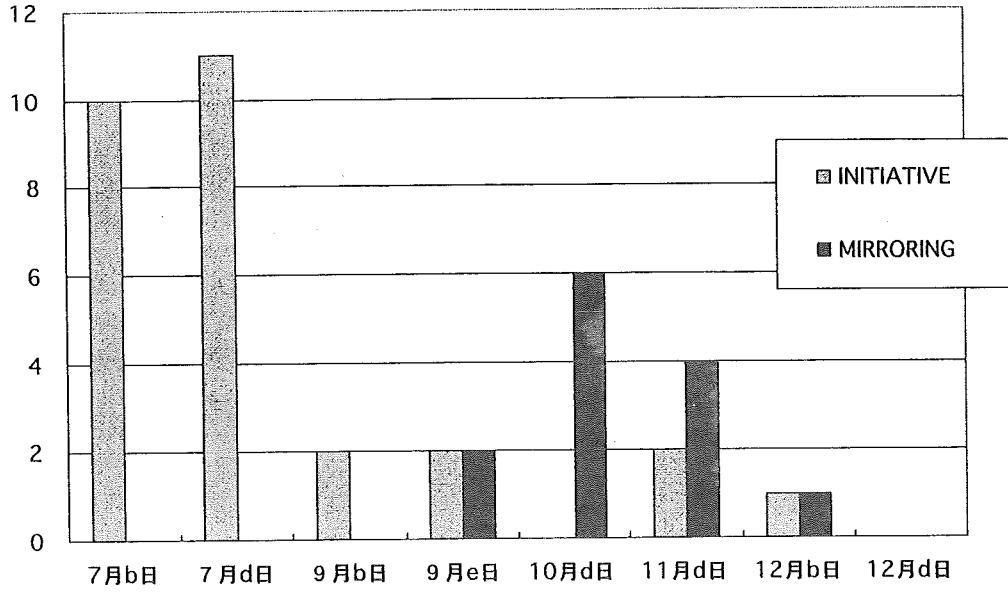
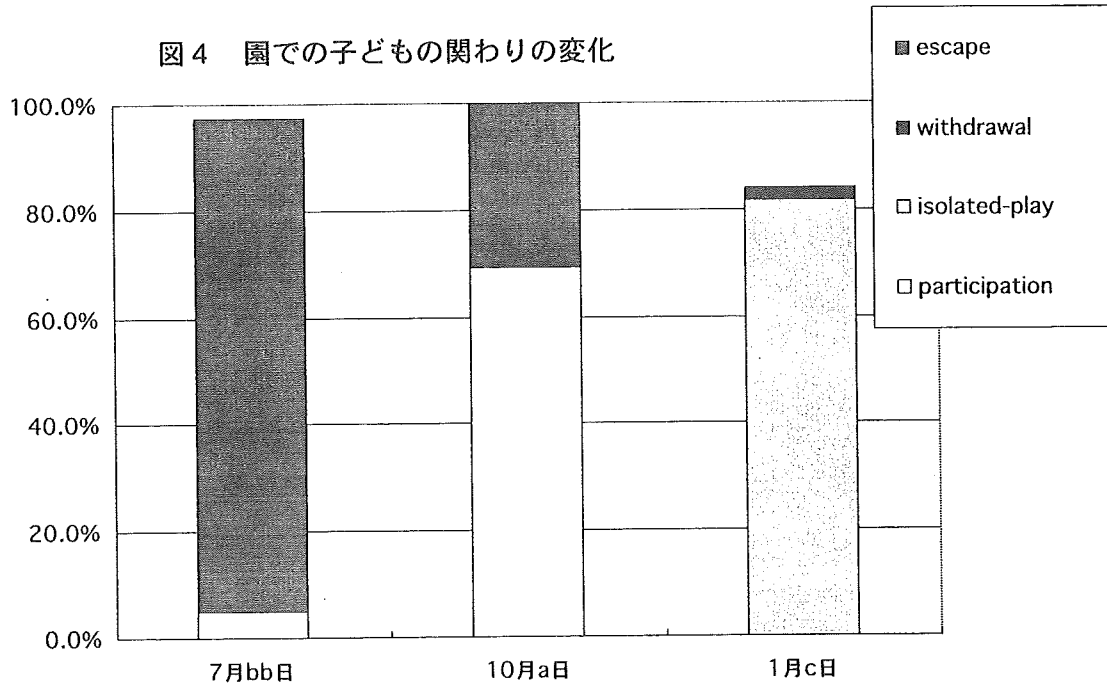


図4 園での子どもの関わりの変化



どもの自由度が増加するとともに、支援者自身意識せずに「子どもの先行行動と同じような行動の表出；ミラリング」を増やしていった（MIRRORINGという指標、出現頻度の集計値）。

c) 母親への助言による関係再調整

各支援のときに母親への助言（必要に応じてカウンセリング）の機会を設けた。助言としては、たとえば子どもが困難をしめす具体的な場面、そのときの注意、情動表出、状況理解などを把握できるような説明が含まれる。そのときの子どもの気分感情の理解を促し、またその場面をほかに置き換えることができることを伝え、予測できるような予備的説明が有効なこともあることなどを説明した。

d) 幼稚園のなかでの子どもの変化

子どもは幼稚園においても、集団との関わりを変化させていた。図4は、幼稚園における周囲との関わりをとらえた（観察時間にたいする生起時間の%）。Y児のばあいには、限られたこだわりの事態が起こっているが、このX児のばあい、集団がもたらす協働的な文脈への参入を避ける。Escapeはそれでも10月以降減っている。1月以降も同様である。しかし1月のときにも、困難をしめしたシーンを抽出するとまだisolated-playが長い。椅子に座っている時間も増えている。

e) より深い問題への接近；他者性の発達の弱さについて

支援経過において繰り返された査定によって、X児の感情（主観的な情動的体験）の発達が弱いということが確かめられていった。(1)12月になされたサリー・アン課題では、X児は通過しているが（Y児は未遂行）、(2)秋以降行われた3回の箱庭では、X児は人形を使いたがらない傾向をしめした。使うように誘導しても生き物、心のあるものとして見立てることが著しく少なかった（Y児も同様）。同様に(3)描画においても生き物を描くことが少なく（Y児も同様）、発話のなかでの主観的感情を語る頻度も少ないことが明らかになっていった。さらに支援がすすみ緊張が緩和され、比較的自在に自己をひとの前で表せるようになった後も、この子どもには、他者との感情の相互浸透の困難が残っている可能性がある。もっともこの感情浸透上の他者性は、目の前の他者との関係では機能しつつあることが、小さな出来事をとおして推測された。図1の12月の結果には、acting-outがあるが、これは、支

援者を前にしての一種の積み木の構成をさいごで破壊し、たたき蹴っていくという連鎖であった。だがX児は、それに続いて、べつの積み木の構成をしてみせ、「できた」と支援者に見せる。ここでは破壊ではない情動スク립トが、他者を意識して機能化されているともいえるのである。

3. 総合的考察1 情動調整の発達の不 全機序論への展開

a) 調整モデルの検討

以上の結果ではまず、たとえば「刺激遮断動作」「うずくまり」など withdrawal という行動パターンが、その子どもの入力刺激への処理系の問題の所在を示唆している。だが支援の回を経るうちに、刺激の社会的意味が変わり、それによって入力刺激への抵抗が幾分低くなっていったことも推測された。これを筆者は、X児に見られる人との関係的な調整が苦手である特徴、感情（主観的な情動体験）の発達の弱さと関係していると推測している。情動的な入力上の困難が、主観的な情動体験の発達を弱め、それがまさしく関係の調整子としても困難を生んでいると推測する。その機構には他者との感情的相互浸透がしにくい支障を起こす何かを推測できるのである。

b) 神経学的検討

上記のように主観的な感情の発達の周辺に問題を探ろうとする関心は、神経学的な発達についての仮説にも合致する。ことに感情体験が、内臓感覚にもとづく身体的状態のマーカとして生みだされ、それが自他の関係のトポロジー的イメージを創り出すとみる説明に結びつく可能性をもっている（Damasio, 1994, 1999）。しかしより詳細な分析や多事例での検証を待つべきことは当然ともいえる。

4. 総合的考察2 関係調整的な情動支援 をめざす方法論の検討

この種の支援に今後必要なことは、「情動調整ならびに情動的体験の状態の査定法」の開発である。その査定法としての要件としては、(1)行動発達上の要素的特徴の査定、(2)相互交渉的応答性の査定、(3)調整不全を強調しているような周辺条件についての査定、(4)主観的な情動的体験の想起しやすい文脈での査定などが、体系化されることが必要と考えられる。

さらに今後この種の支援に必要なことは、専門化と連携が必要であることであろう。いっばうで支援の専門性の発展に大学など研究機関が関わる必要があるとあり、他方で地域支援などとの連携について、資格などの制度化されたネットワークを活用したりして交流が進められることが必要であることは確かである。しかし支援状況の進展が進まぬなかで現場の多くの支援者が、情動調整的なアプローチに関心をもっているにもかかわらず、問題はある一つの測度、査定法が生まれれば済むものではないであろう。情動発達論の研究の展開そのものを集約的な研究者連携によって生みだされる必要があるといえよう。

文献

Campos, J. J., & Barrett, K. C. 1984 Toward a new understanding of emotions and their development. In C. E. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc, (Eds.), *Emotions cognition and behavior*, pp. 229-263. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Damasio, A. R. 1994 *Descartes' error : Emotion, Reason and the Human Brain*. N. Y. ; Avon Books. (アントニオ・R・ダマシオ 田中三彦訳 2000 『生存する脳；心と脳と身体の神秘』講談社)

Damasio, A. R. 1999 *The feeling of what happens*. SD, USA; A Harvest Book, Harcourt, Inc.

Denham, S. A., Lydick, S., Mitchell-Copeland, J., & Sawyer, K. 1996 Socioemotional assessment for atypical infants and preschoolers. In M. Lewis, & M. W. Sullivan (Eds.) *Emotional development in atypical children*. Mahwah, N. J. ; Lawrence Erlbaum.

Sroufe, L. A., Schork, E., Motti, F., Lawroski, N., & La Fzrenier, P. 1984 The role of affect in social Competence. In In C. E. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc, (Eds.), *Emotions cognition and behavior*, pp. 289-319. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

須田 治 1999 『情緒がつむぐ発達』新曜社